

## 令和4年度 第2回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日時】 令和5年3月7日（火）  
14時30分～16時00分

【場所】 新潟市歴史博物館セミナー室

【出席委員】 池田 哲夫 会長 （新潟大学人文学部名誉教授）  
本井 晴信 副会長 （元新潟県立文書館 副館長）  
上村 啓 委員 （BSN新潟放送 事業局次長兼事業部長）  
久保 有朋 委員 （古町花街の会）  
佐藤 宏欣 委員 （新潟市立南浜中学校長）  
渋川 綾子 委員 （にいがた湊あねさま倶楽部）  
坂内 徹 委員 （新潟大学人文学部名誉教授）  
羽生 英一 委員 （公募委員）

【オブザーバー】 遠藤 和典 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 坂井 秀弥 新潟市歴史博物館 館長  
高桑 一代 新潟市歴史博物館 総務担当次長  
大森 慎子 新潟市歴史博物館 学芸担当次長  
鷺尾 雄二 旧小澤家住宅 館長  
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長  
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長  
設楽 明子 新潟市歴史博物館 職員  
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員

## 【 次 第 】

### 1.開 会

### 2.館長挨拶 詳細別紙

### 3.議事

#### (1) 令和4年度の館運営報告状況

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 1～4 に沿って、事務局から説明。

#### (2) 令和5年度事業計画書

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 5～6 に沿って、事務局から説明。

《 質疑応答 》 詳細別紙

### 3.閉会

## 《館長挨拶》

(坂井 館長)

私が昨年4月に博物館館長に就任して12ヶ月目、ようやく1周で何となく様子が分かってきたところ。本日は令和4年度第2回目の運営協議会、今年度の事業実績報告と来年度事業についてご説明させていただく。要望や忌憚ないご意見をいただきたい。今日は大変暖かく春らしくなってきた。また世の中全体がようやくコロナから解放されるのかという明るい兆しも見えてきた。一方で光熱費の高騰が博物館にも重くのしかかっている。様々な場面で節電など市民の皆さまにもご協力いただき何とか乗り越えられるかと思っている。来年度、世の中が堅調に進めばよいと思い、それに伴ってみなとぴあの役割がより一層市民の中に定着し、遠くからお越しいただく方にも楽しんでいただけるような活動ができるといいと考えている。

現在1階企画展示室では「近世新潟町」展を開催中。新潟市の核になったのが近世の新潟町であるので、後ほど私をご案内させていただく。

## 《質疑応答》

(渋川 委員)

入館者数がだんだんと増えてきているのは喜ばしいこと。コロナ禍の中で職員の皆さんが諦めずにやってきたことが実を結ぶのかと嬉しく感じている。

旧小澤家住宅の量り売りイベントは面白い。実際に昔を体験できるいい企画。そのためだけに来館した人数はどのくらいか。

(鷲尾 館長)

1回目は1/29、雪の中での開催であったが60数名、2回目2/28は100名程度であった。朝ごはん会は10:00開始で10人限定のところほぼ定員になっている。量り売りマーケットでは農産物・焼き菓子など買っていた。

冬期間は1日の来館者10人程度というような厳しい日もあるので、施設普及イベントという点でも意義があると考えている。

(渋川 委員)

好評だったので、これからも力を入れて、ぜひ1つの名物にしていきたい。

---

(坂内 委員)

資料の2ページ、博・学連携事業について、小学校67校見学に来ているとあ

るが、これは昨年度より増えているのか。

(大森 次長)

昨年度は学校団体が来館する時期とコロナが増えた時期とが重なってしまったこともあり、キャンセルも多くあった。今年度はむかしのくらし展開催中には連日2~3校いらしていただくなど、かなり増えた印象であった。

(坂内 委員)

新潟市小学校106校のうち67校なので、随分元に戻っているようだ。

もう1点、出前授業、リモート授業とはどのように、どんなことをやっているか教えていただきたい。リモート授業などしていただくと、遠いところ、バスでないと来られない学校もあるので、もちろん実体験が一番いいが、リモートでできるとバスなど使わずに昔の道具を教えてもらえるのでいいと感じた。

(森 課長)

テーマを決めて話してほしいという依頼で、リモートで可能な内容であればお受けしている。例えば治水だとか、水に関わる地元の資料を交えてお話ししてほしいという依頼にリモート授業で対応した。

出前授業の方は、実際の物に触れて、見ながら話してほしいという依頼で、昔のくらしの道具は小学校3年生の社会科の単元が中心となる。1年生の国語の授業で、実際の物を体験というか実演を見ながら昔の仕事を見るようなことも行った。また、物だけお貸しするような準備も整えているが、人を交えて実際に体験できる方がいいという依頼であったため、出前授業というかたちをとった。

(坂内 委員)

出前授業は制限なくお願いできるのか。

(森 課長)

物を運ぶことが伴うと職員1人では厳しいし、コロナ禍においては全学年が一斉に集まってというのが難しい側面もあり、クラスごとに3回に分けてやるというようなことが必要になるので、日程的に難しく調整してようやく実現したということがあった。そういった職員の都合を含めたスケジューリングがクリアできれば実施可能である。

(坂内 委員)

とてもいい取り組みなので、小学校に伝えていきたい。

(池田会長)

柔軟な取り組みを考えて実施しているということ。

---

(久保 委員)

「ふるまちこども研究所」は素晴らしい取り組みと思う。金沢などの歴史都市では子どもの方からしっかり学ぼうという意識が根付いていると感じるが、新潟でもそれが必要。能動的に学ぶ機会を作っていくのは素晴らしいが、だからといって小学生を町に放って自由にどうぞ、では進まない。修正とプログラムとのバランスが肝と感じるが、事前に学習機会をどのように設け、またやっていく中でどの程度担当学芸員がマネジメントやフォロー、誘導して進めていったのか。

(森課長)

今年度ではないが、やはり1つには準備。事前のインタビューや面談を通してどういうものを調べていくか、ヒントとなる資料の準備など教育普及担当が進めていた。

今、1階エントランスで紹介している中学生課の調査研究は、小学生時代の過去何年かの活動(古町学初年度及び古町カルタの取り組み)の中で醸成された関心から、もう少し調べたいということで発展したもの。どうやって資料のかたちにもとめていくかというところや、学芸員が仕上げをしたりというところはあるが、小学生からの活動の中での取り組みが関心に向かって成就した。最初のルートを作ってあげる小学生の部から、経験を重ねて考えられるようになった中学生の部が新しくできたのは、子どもたちが能動的に取り組んできた成果と感じている。

(久保委員)

「ふるまちこども研究所」は古町学から始まったもので、始まって間もないにも関わらず、中学生課という発展性が見えるのはすごいと感じる。今後長く続いていく中で、高校への発展性が見えたり、大学との連携につながっていけば非常に面白い。

---

(本井委員)

「ごっつお！」展、動かないものばかりを陳列して、静かなところでの展示だった。ある程度やむを得ない条件とは思いますが、例えば1つの具体的な料理なり動作が、どの場面でどんな使い方で機能を果たしていくのか、動きを強調するような展示の仕方があると、もう少し具体的な創造につながる気がした。自動的に動くような仕掛けはなかなか出来ないが、何か動きを感じられると、印象に残り、

それが口コミとなってこの展覧会が面白い、と可能性が広がる。言うほど簡単にできるものではないか、実際の生活の中ではどんなものでも使われていたし動いていた。動いているのが当たり前というくらいに思って接することが必要なのではないかと感じた。

(池田会長)

ご意見を踏まえて展示の仕方など工夫していただきたい。

---

(上村委員)

施設普及事業でみなとぴあファンクラブの会員は何人程度か。コロナ以前と比べての推移は。

(石田課長)

会員数は現在 120 名程度。元々少ないので、コロナ前と比べて大きな増減は見られない。

---

(羽生 委員)

一市民の意見・要望としてお聞きいただきたい。

市民にもっと足を運んでもらいたいと思っている。子どもたちは授業の一環としても来てもらっているが、成人の方の足が遠のいているのではないかと感じている。比較的時間のあるような高齢の方はまだしも、若者がもっと関われる、協力してもらえようようなことがあるといいと感じている。

2つ目に、歴史博物館は市民の誇りや市のアイデンティティのベースとなる場所だと思っている。新潟市は横浜などと比べるとみなとまちというイメージが薄い。「みなとまち新潟」をシティプロモーションとしてやってきた中でうまく全国的に浸透していない。市民の心の中で誇りとなるようなものをみなとぴあから醸成していけたらいいと思う。具体的に、というのはまだこれから。皆さんが一生懸命やられている活動の中で少しずつ実現してほしい。

3つ目にアクセス面がネックと感じる。萬代橋から歩くのもいいが、旅人などは交通弱者。外の人に訴えるにしても、成人の方でも、車を持っている人はいいが、バスを使うにしても何線に乗ればいいのか分からない。もっとアピールして苦痛を感じさせずに楽しく来られるといいと思う。

(森課長)

ご意見として承る。

特に1つ目2つ目は博物館の設置目的に深く関わることでもあるので重く受けとめ、それに沿って事業を進めていきたい。またそれに沿った活動を既に行っているのでご紹介したい。まず協力してもらえることとして、ボランティアの方々にも助けてもらいながら当館は活動しているが、今年も例年より多くのボランティアの応募があり、また新しい方が加わり、今研修を進めている。高校生ボランティアを志願する人も増えてきており、色々な層で活動の場となっていることをご報告する。

2つ目の市民の誇り・アイデンティティの部分では、「みなとまち」に関しては古町学。これが古い時代からある一番核となるところなので、改めて深く考えていきたい、共有していきたいという動きがある。また今年度始まったのが「浜・潟・山の歴史とくらし」の講座。これは地域内の資料館・博物館に協力してもらって地域全体に関わる、浜と潟・山の要素で共通しているところ、独自のものを資料館・博物館の物を見ながらみんなでシェアしよう、考えようという取り組みをしている。参加者からは良かったとの感想もあり、来年度も継続していくこととなった。ご指摘のご意見を実現していく兆しが見えてきたのではないかと思います。ご紹介させていただいた。

(高桑次長)

3点目のアクセスの点については、市民の方はもとより観光客の方からのお問い合わせも多く、歴史博物館でも課題と思っている。バスの接続の説明も難しい、市民でも分かりにくい。博物館だけで出来るものではないが、新潟市の計画の中で「にいがた2km」も進んでいるので、博物館を1つの名所として、その中で博物館を含めたアクセスの方法を新潟市にも考えていただければと思っている。また来館者の意見やアイデアも伺っていきたいと思っている。

(遠藤歴史文化課長)

頂いた意見3つとも、従前より新潟市においても博物館においても課題だと思っている。新潟市民、来館者、観光客の皆さまを満足させるのは難しいが、ある種未来への投資、新潟の定住者を増やす、新潟を理解するためには小中学生に向けて新潟の歴史、「みなとまち新潟」を軸に成長いただき、色々な場面で新潟の良さを語れる子どもたちを育てていくのが大事だと認識している。新潟市でも、新年度から新しい総合計画がスタートする。文化スポーツ部としても子どもたちに対する普及啓発もたくさんしていかなければならないと強く認識している。

(渋川 委員)

令和5年度の「1964展」は市民の共感性を呼びやすい企画だと感じる。我々の年代は誰でも知っているがそれをどう次の世代に伝えるか。激動の1年だったことをどう伝えるか、何か新しい展示方法がほしい。先ほど本井委員もおっしゃったが、展示方法の1つとして、地震の音だとか昭和30年代の町の音だとかを組み合わせた、何か画期的な方法を取ってほしいと今感じた。パネルだけでなく、凄い1年だったということ伝える工夫をしてほしい。

(森課長)

新潟地震や国体など、個別の事象としては今までの企画展や収蔵品展で取り上げてきたがそれとは関連できない1年、新潟という町や人々、社会にとってどういうものであったかを伝えたい。ただ、自主企画の中でやるので他の企画展より一層予算的な制約がある。それだけにどのように見てもらおうか展示の工夫はやらなければならないし、テーマ・ねらいとしても必要なことと考えているので、ご意見を踏まえて展示の仕方は工夫してやっていく。

(本井委員)

どの展示においても色々な世代の人が色々な地域からやってきて、今までの自分の体験・思い出と重ね合わせたり、初めて見るものに刺激を貰ったり、新たな知識を得たりする。企画展でやっていたポストイトで感想書いてもらうなどはいい方法だと思っているが、たくさん書いてもらって終わりとししないで、新潟地震や東京オリンピックを直接体験している人も書いてくれているのであれば、時代の証言として他の手段・映像だけでは伝わりにくい、まさに時代の感覚が再現されている可能性があるので、意識して証言を集めてはどうか。記録の蓄積をやっていくと、ここならではの仕事であるし、将来の財産となる。次の世代の人たちに、ものや文字だけでは伝わり切れないものも伝えていけると思うのでぜひ意識してほしい。

私も証言しますよ。

(大森次長)

我々展示を作る側が実体験として分からないことなので、証言を事前にお聞きするなどして、どうかたちにしていくか意識して取り組みたい。

---

以上